

ver.

04

福島県 ホープツーリズム 総合ガイドブック

Fukushima Hope Tourism

世界で唯一、
複合災害を経験した
福島でしか得られない
新しい学びのスタイル



【 知事挨拶 】

ふくしまから、 持続可能な未来を探求・創造する

～想像力を働かせて、もっと深く、前向きに。一緒に学び合う新しいスタディツアーヘ～

東日本大震災以来、全国の皆様からたくさんの励ましや温かいご支援をいただきしておりますことに改めて心から感謝を申し上げます。

福島県は世界で唯一、地震、津波、原子力災害、そして風評被害を一度に経験し、今もなお複合的かつ多様な課題がある一方で、復興を強く願い、困難な状況に屈することなく未来を見据え、挑戦を続けている人々が大勢います。そんな福島だからこそできる“新しい学び”があります。

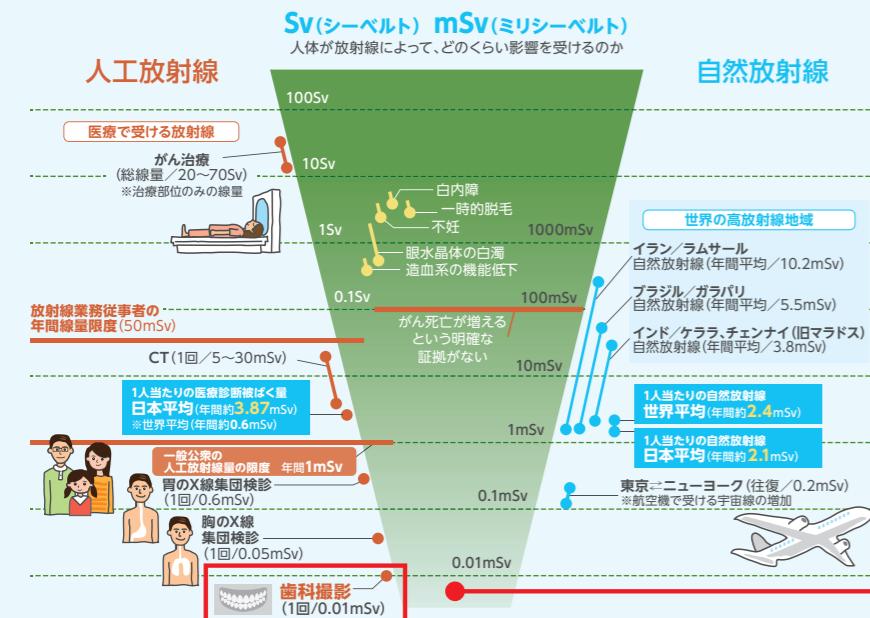
福島県では、福島のありのままの姿と復興に向け果敢にチャレンジする人々との対話を通して、震災・原子力災害の教訓、復興、そしてこの逆境からどうすれば脱却できるのかを考えることで、自分自身を成長させる学びの旅「ホープツーリズム」を推進しております。

本ガイドブックでは、教育旅行、企業等の人材育成、外国人留学生等のニーズに応じたツアー内容や学びの効果等について紹介しておりますので、ぜひご覧いただき、福島をフィールドとした「ホープツーリズム」の実施をご検討いただきますようお願いいたします。



福島県知事 内堀 雅雄

●放射線について



2泊3日のツアー時の累積線量

福島県内の大部分は除染や自然減により放射線量が大幅に低下しています。2泊3日のモデルコースで浴びる被ばく線量の合計は、これまでの実績からも概ね歯科用レントゲン撮影1回の半分以下となっています。

2泊3日
約0.004 mSv

【注意】 1) 数値は有効数字などを考慮した概数。 2) 目盛(点線)は対数表示になっており、目盛がひとつ上がる度に10倍となる。
【参考】 (独) 放射線医学総合研究所、(公) 原子力安全研究協会「新版 生活環境放射線(国民線量の算定)」(2011年)などにより作成

【 参加者の声 】

教育旅行:先生

「福島だけの問題じゃ無い。」根本のところに気づきがあるのが教師としては一番嬉しい。

京都教育大学附属京都小・中学校

教育旅行:生徒

地域の人々の思い、情熱、決意。
前向きな姿勢がとても印象に残っている。

東京都進学指導重点校 西高等学校 2年

教育旅行:生徒

教科書ではわからないことを学べた素晴らしい経験!

京都大学附属小学校・中学校 中学3年

教育旅行:先生

地域の人から話を聞く、会話する。
本当に大切な、福島でしかできない貴重な経験。

筑波大学附属駒場中学校・高等学校

教育旅行:先生

HMとの対話が、彼らが生きていく時に根本の栄養になると思う。

千葉市立千葉高等学校

教育旅行:生徒

今までの自分は知る気がなかったのだと気が付いた。

神奈川県立横浜緑ヶ丘高等学校 2年

教育旅行:生徒

こんな顔は授業では見せてくれない。
そう思うほどいい顔で学んでくれた。

仁川学院中学・高等学校

留学生

福島で起こった事実を次世代に伝えていくことが大切。

広島大学観光学ゼミ 留学生

企業研修

離れた場所から考えているだけではわからない、
現場ならではの目線を感じた。

国家公務員研修(経済産業省内定)

【 目次 】

知事挨拶 02

参加者の声 03

フィールドマップ 04

ホープツーリズムとは 06

[考える]

フィールドパートナー 08

学びの流れ 10

[見る]

施設 12

体験 21

[聞く]

ヒューマン 22

学校交流 25

[モデルコース]

教育旅行 26

企業研修 28

インバウンド 30

個人向けツアー 31

●本誌掲載データは、2022年3月現在のものです。●内容は予告なく変更される場合もありますので事前にご確認ください。●掲載の記事・写真・図版・イラスト等の無断転載を禁じます。また、写真はすべてイメージであり実物とは異なる場合があります。●掲載の地図や縮尺、所要時間などは、およそその目安となるものです。●この冊子に掲載された内容により生じたトラブルや損害などについては、補償いたしかねますので、予めご了承願います。

多彩な発見と出会いの フィールド『ふくしま』

北海道・岩手県に次ぐ全国第3位の面積を持つ福島県。

その広大な県域は、地形・気候・交通・歴史などの面から、太平洋と阿武隈高地に挟まれた「浜通り」、阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれた「中通り」、奥羽山脈と越後山脈に挟まれた「会津」の3地域に分けられ、それぞれの魅力を活かして発展してきました。

津波と原子力災害の影響を受けた浜通りを中心に、県内各地の多彩な観光・学習コンテンツを組み合わせたプログラムの実現が可能です。

主要都市からのアクセス

東京から
 ●電車利用
 ・東北新幹線 東京駅～郡山駅(約1時間20分)
 常磐線(特急ひたち) 東京駅～いわき駅(約2時間30分)

大阪から
 ●飛行機利用
 ・伊丹空港～福島空港(約1時間10分)
 ●電車利用
 ・東海道新幹線+東北新幹線 新大阪駅～郡山駅(約4時間5分)

札幌から
 ●飛行機利用
 ・新千歳空港～福島空港(約1時間20分)

函館から
 ●電車利用
 ・北海道新幹線 新函館北斗駅～仙台駅(約2時間40分)
 仙台駅～福島駅(約20分)

インフォメーション

●ホープツーリズムに関する総合窓口

福島県観光物産交流協会では、ホープツーリズムに関するコンテンツの集約、学校様の学びのニーズへの対応、旅行会社様の商品造成・ツアー催行をサポートする現地手配機能を兼ね備えた「総合窓口」を設置しております。

お問い合わせ先 (ホープツーリズム推進課)

📞 024-525-4060 8:30～17:30(土日祝日を除く)

✉️ hoptourism@tif.ne.jp

<https://www.hoptourism.jp/>

ホープツーリズム



それは明日の学びの原動力。 福島で感じる希望(ホープ)。

震災・原子力災害の被災地域をフィールドとした新しいスタディツアー



「ホープツーリズムとは」



世界で類を見ない「複合災害(地震・津波・原子力災害)」を経験した唯一の場所、福島県。

事実、教訓、復興への挑戦から得た学びを私たちはあえて「震災・防災学習」と呼ぶことはしません。

ホープツーリズムは、複合災害の教訓等から「持続可能な社会・地域づくりを探求・創造する」

福島オンリーワンの新しいスタディツアーです。

地震・津波、原子力災害という世界で類を見ない複合災害を経験した福島の「ありのままの姿(光と影)」と、様々な分野で「復興に挑戦する人々(ヒューマン)との対話」を通したインプット。震災・原子力災害を「福島だけのローカルな問題(他人事)」と限定化せずに、教訓等を「持続可能な社会・地域づくりの実現、日常生活、自分自身の行動変容等」の“これからの中”に視野を広げ、自分事としてどう活かすのか探究・創造するアウトプット。この一連のプログラムにより、アクティブラーニングの手法を用いた「主体的・対話的で深い学び」を実現します。福島を学ぶことで感じる希望は、参加者一人ひとりに、これからの成長につながる「学びの種」をもたらし、「明日の学びに向かう原動力」を育みます。



ホープツーリズム 3つの特徴

見る

施設見学、フィールドワークから
ありのままの姿を体感

復興に向け確かに歩み出している地域、持続可能な未来を担う新しい取組が始まっています。一方、長年の避難指示による地域への影響を感じる街並み、避難指示が継続中の地域……。報道だけでは伝わらない“光と影”。その光景が、福島の「今」です。

聞く

様々な立場・分野で復興に“挑戦”
する人々(ヒューマン)との“対話”

震災、津波、原子力災害、風評……未曾有の困難の中で、それでもなお前へ進もうと果敢にチャレンジする人々が、福島にはたくさんいます。そうした人々を本ツアーでは「ヒューマン」と呼んでいます。挑戦を続けるヒューマンたちとの対話から、多くの刺激や気づきを得ることができます。

考える

震災・原子力災害の教訓を未来(社会・
地域・日常・自分自身)にどう活かすか

まとめのワークショップでは、震災・原子力災害により顕在化した様々な社会課題(人口減、高齢化、地域の衰退、エネルギー問題等)は「福島だけの問題」ではなく「日本社会や地域が抱え、解決すべき問題」であるという視点に立ち、自分たちがどのような未来を創っていきたいなどについて議論します。

【 考える 】

フィールドパートナー(FP)

フィールドパートナーは、ツアー中のアテンド、ファシリテートを担当します。1日ごとの振り返り(リフレクション)や、最終日のワークショップなどを通し、中立・客観的な立場から、参加者とともに、学びの成果へと導く総合案内人です。

現地で活躍する総合案内人

探究心・好奇心に寄り添う



フィールドパートナー(FP)の担う役割

インプット 中立・客観的立場

- 震災・原子力災害、復興に関する情報の伝達
- 施設等の見学後、ヒューマンとの対話後の情報整理、補足説明
 - 論点の明確化、多様な視点への展開
- 随所の問い合わせ・介入
 - 参加者の探究心や学びに向かう力を引き出す

アウトプット 振り返り・ワークショップの企画・運営



この地域で

感じる想いは原動力へ

一度しかない
特別な瞬間をつかむ

参加者と共に
丁寧に物事に向き合う



やまぐち ゆうじ
山口 祐次 さん

私自身、被災した住民の一人です。避難先での生活再建を決め、震災と向き合うことが辛い時期もありました。だからこそ「この教訓は必ず活かさなければならない」という強い想いの中、自分の役割に気づき、フィールドパートナーを担当することになりました。ツアーでは“学びの空間をつくりあげる”ことが大切です。何のための学習なのか、見て・聞いて・何を感じたか、どんな変化が生まれたか……。体験から得た想いは強い原動力になります。参加者一人ひとりがしっかりと自分のテーマを見つけ行動につなげるよう取り組んでいます。

プロフィール

長年、設備機器メーカーにおいて事業管理業務全般の責任者として勤務。震災で福島事業所閉鎖となり退職し、オフィス・クリエイト福島を設立。各研修、地域企業の経営サポート、地域づくりや復興関連の業務を実施。2022年一般社団法人ふくしまリリアを設立し、震災とその歩みの伝承、魅力溢れる地域づくりのための効果的なサポートに挑戦している。

ひらやま まさし
平山 将士 さん

心が動く瞬間を大切にしてほしい。僕はその瞬間をサポートしたいと考えています。ツアーの参加者にとっての非日常は僕たちの日常。その差から参加者が知ること、感じることは膨大なインプットになります。その中でこれからの生活に生きるヒントや教訓がこぼれてしまわないよう参加者やツアー全体を洞察する。より多くの気づきをこのフィールドで得てほしいです。参加者ひとりひとりにとっては一度きりかもしれない場です。その一度でなにかしらのきっかけを見つけることができるよう導くことができるフィールドパートナーを目指しています。

プロフィール

福島県いわき市の地方新聞に20年余勤務し、主に社会部記者として報道の現場を歩く。東日本大震災時は、震災の記憶を残す報道写真集の企画・制作を担当。2018年4月に一般社団法人ならはみらいに入社。みんなの交流館ならはCANVASの開館に携わり、現在は移住推進係長として全町避難からの復興の道を歩む楢葉町のまちづくりに挑戦している。

かんの たかあき
菅野 孝明 さん

フィールドパートナーとして、「事実を伝える」・「共に考える時間」・「考え続ける意識の醸成」を大切にしています。それを実現するために、相互理解につながる対話の場つくることが、ホープツーリズムのフィールドパートナーの重要な役割です。

参加者は真剣な眼差しで話を聞き、感じたこと・考えたことを率直に伝えてくれます。実際に「来て、見て、感じて、共に考える」ことが、福島だけではなく、自分の地域や社会全体の未来につながります。「福島から学ぶ」場をつくり続けます。そして、私たちは参加者と共に学びに向き合う存在だと思っています。

プロフィール

建設コンサルタント、進学準備教育企業を経て、2012年にNPO法人ETIC.の「右腕プログラム」浪江町復興支援コーディネーターに採用。被災地復興、まちづくり計画作成・調整支援、住民との合意形成支援などに従事。現在は一般社団法人まちづくりなみえの事務局次長として、避難等による人口の大幅減からの新たなまちづくりに挑戦している。

【 考える 】

学びの流れ

ツアーチャーは毎日、夕食後に「振り返り（リフレクション）」の時間を設けるほか、ツアーフィナルには「見る」「聞く」を通じて学んだことを深め、アウトプットするワークショップを実施します。このワークショップでは、震災・原子力災害により顕在化した様々な社会課題（人口減、高齢化、地域の衰退、エネルギー問題等）は「福島だけの問題」ではなく「日本社会やそれぞれの地域が抱え、解決すべき問題」であるという視点に立ち議論します。



事前学習

..... Pre-learning

ツアーチャーに入る前に、震災・原子力災害の基礎知識（福島県の概要、被害状況、復旧状況の推移等）を解説。さらに学びの意識づけとして、ホープツーリズムの学びの特徴や多角的に物事を知る視点をレクチャーします。（オンラインでの事前学習にも対応。）



1日の振り返り（リフレクション）

..... reflection

毎日、夕食後に振り返り（リフレクション）を行い、疑問や気づきなどを共有することで情報を整理。スムーズに最終日のワークショップに臨むことができます。仲間同士でも、感じ方や考え方には違いがあり、語れば語るほど視野が広がります。



ワークショップ

..... workshop

最終日にはまとめのワークショップを実施。ツアーフィナルでの学びを踏まえ、次世代を担う自分たちは、どんな未来を創っていくいかについて、ひとりひとりが社会を担う当事者として「自分事化」します。



持ち帰り・学びの成果

1

“もやもや感”を持ち帰る

社会課題は簡単に解決しない（“もやもや感”を持ち帰る）が、「考え続けること（探究心・自分事化）」が重要。

2

多様性の尊重と対話の重要性を学ぶ

社会課題は立場や考え方によって様々な意見がある。「多様性の尊重と対話の重要性」AorBの二者択一ではなく、議論によって第三の道（C）が開かれることもある。

3

「見極め力」「判断力」を身につける

情報過多の社会における「物事の本質を見極める力」や「判断力（リテラシー）」を身につける。情報とどう向き合い選択・判断するか。自分で見聞きした生の情報の重要性。

4

変化や逆境への向き合い方を学ぶ

変化や逆境への向き合い方（人生観・生き方）。進路選択や生き方について希望と不安の狭間に立つ生徒の皆さんに、挑戦することの大切さを伝える。

福島で感じた希望。それは明日の学びの原動力 ▶▶ 参加者自身の成長へ！

事例

ふくしま学宿 チームHYOGO

ホープツーリズムを体験した兵庫県内の高校生たちが、「福島の今」を伝えるために同プロジェクトを発足。福島の学びを持ち帰り、地元の兵庫で発表会や交流会を開催し、教訓や気づきを発信し続けています。



灘高等学校 東北企画

東北を応援する活動「東北企画」の一環でホープツーリズムに参加。「福島のため」の取組は、現在では参加者の自己探究やリーダー教育の場となり、得た学びを毎年文化祭で発表するなど、校内行事のひとつになっています。



お茶の水女子大学 附属高等学校

スーパーサイエンスハイスクール（SSH）として教育プログラムにホープツーリズムを起用。「福島フィールドワーク」と題して、科学的根拠に基づいた価値判断・意思決定について継続的に学んでいます。



大阪学芸 中等教育学校

ツアーフィナル後もホープツーリズムで訪れた地域や団体と積極的に交流。生徒主導で福島県内で交流イベントを開催（企画立案、運営）するなど、活発な取組につながっています。



【見る(施設)】

東日本大震災・原子力災害伝承館



正にホープツーリズムの学びの導入拠点。館内の映像や展示などの豊富な資料から、震災・原子力災害直後から現在までの経過・復興のあゆみの全体像を学ぶことができます。

世界でも類を見ない未曾有の複合災害の記録やそこから得られた教訓、そして復興の歩みを国内外に伝え、さらには将来へ引き継いでいくためにつくられた施設です。福島だけが経験した原子力災害を伝えること、これまでの復興の過程を収集・保存・研究し、風化させることなく後世に継承し、また世界と共有することを目的としています。館内にはさまざまな資料や実際の記録や映像などが多数展示され、震災・原子力災害直後から現在までの経過や復興の歩みについて学ぶことができます。

a.震災と原子力災害の全容を映像で見た後、パネル展示を見ながらスロープを上る。 b.津波被害を受けた消防車を展示。

c.東京電力福島第一原子力発電所をジオラマで見ることができる。 d.自然に溶け込むような外観。屋上からは海側を一望できる。

■双葉町大字中野字高田39 圖0240-23-4402

【周辺施設】

双葉町の復興に向かって、人と人とをつなぐ、交流を育む拠点

双葉町産業交流センター

双葉町の復興をけん引する中野地区の複合施設で、貸会議室や貸事務所のほか、フードコートや土産物店等の商業施設が入ります。町民や町内の企業関係者、周辺地域を訪れる人などが交流する拠点になること、さらには新たな価値を生み出していく場所になることを目指しています。



■双葉町大字中野字高田1-1 圖0240-23-7212

【周辺散策】

町並みを歩いて肌で感じる震災の爪痕

JR双葉駅周辺

JR双葉駅を中心とした町の特定復興再生拠点区域(居住が制限されている帰還困難区域内のうち、将来的な避難指示解除を目指すエリア)。シャッターがゆがんだままの消防分団の屯所やガラスのない店舗など、震災直後から手付かずの建物も多く、震災・原子力災害の影響を肌で感じます。



■双葉町大字長塚字町西

【見る(施設)】

震災遺構 浪江町立請戸小学校



海岸から約200mに立地。校舎は津波に呑まれ半壊しましたが、迅速な判断と避難により奇跡的に犠牲者は出ませんでした。今なお被災当時の様子がほぼそのまま残っています。

福島県では初となる震災遺構。震災の脅威や教訓とともに、地域の記憶や記録を後世に伝えるため、また、防災意識を高めることを目的として、被災当時の姿を保存しています。津波の被害が大きい1階の教室部分と体育館は限りなくそのままに近い状態で残され、校外や通路などからも見学できるよう整備されています。2階部分には震災の被害の大きさや原子力災害による避難の経緯などについて伝えるパネルのほか、訪れた人が黒板に書いた応援メッセージなどが保存されています。

a.当時のままの姿が残る教室からは、津波の威力をさまざまと感じる。 b.放置された保健室の場所を示す札。

c.泥にまみれた資料も生きく残されている。 d.卒業式の看板が掛けた体育館の内部。

■浪江町請戸56 圖0240-23-7041

【周辺散策】

津波被害の状況を一望できる高台の共同墓地

浪江町営大平山靈園

海岸から約2km離れた高台に広がる共同墓地。請戸地区や太平洋を一望でき、津波の被害の甚大さを感じます。地震発生直後、請戸小学校の生徒が避難に向かった場所で、当時は烟が広がっていました。その後町民の希望により、震災によって亡くなったご遺族のためのお墓がつくれられ、「大平山靈園」として整備されました。犠牲者への鎮魂、後世への訓戒のために建てられた慰霊碑とともに、震災の記憶を今に伝えています。



■浪江町請戸

[見る(施設)]

Jヴィレッジ



アスリートたちの聖地

復興の象徴



日本初のサッカー・ナショナルトレーニングセンターでサッカー日本代表の合宿も行われました。震災直後は原子力災害の対応拠点として使用されていましたが、復旧が進み、2018年7月に一部営業を再開。2019年4月には全面再開を果たしました。

浜通りに位置し、東北地方にありながら温暖な気候のため、冬季でも雪の影響をあまり受けることなく年間を通してサッカーを楽しめます。施設面積は、東京ドーム10個分となる49haにも及び、天然芝や人工芝のピッチはもちろんのこと、全天候型サッカー練習場、レストランやホテル、ホール、フィットネスジムなども備えた一大トレーニングセンターです。スポーツだけでなくさまざまな分野で多くの人が集い、復興のシンボルになることが期待されています。

a.施設面積は49ha。東京ドーム約10個分。b.全面が膜屋根に覆われ、気象条件に左右されず利用が可能な全天候型練習場。c.166席の階段教室スタイルのコンベンションホール。

楢葉町山田岡美森8 開0240-26-0111

[周辺散策]

太平洋を一望できる絶好のロケーション

天神岬スポーツ公園

キャンプ場、温泉、宿泊施設が一体となった、総合レジャーエリア。さらには広大な芝生広場やサイクリング場、ドッグランなども整備されており、ここだけで泊まって、食べて、思いっきり遊ぶ、が叶います。海岸沿いの岬にあり、太平洋を見下ろすロケーションが自慢です。



楢葉町北田天神原27-29 開0240-25-3113

町の新たな特産品 热帯フルーツを開発

トロピカル・フルーツミュージアム

震災以降休止していた二ツ沼総合公園にあるフラワーセンター内の園芸ハウスを亜熱帯に近い環境にし、国産熱帯フルーツ栽培を行っています。町の新たな特産品として国産バナナ「綺麗」を開発。農業と観光の再生のため、今後もさらなる特産品を生み出すことを目指しています。



広野町下北迫大谷地原57-1 開0240-23-7704

[見る(施設)]

福島県環境創造センター交流棟 コミュタン福島



福島の未来を考える



震災・原子力災害の概要、放射線の正しい知識、これからの福島の環境再生について理解を深めることができます。

愛称は「コミュタン福島」。放射線や環境問題を身近な視点から理解するため、福島県が設置した施設です。環境の回復への意識を深めてもらうため、模型や映像、グラフィック等により、震災と原子力災害、放射線や福島の環境の現状について展示しているほか、360度球型シアターやホールなども備えています。コミュタン福島で得た学びや、体験から得た知識、深めた意識などを共有し、福島の未来を考え、創り、発信するきっかけとなることが目的です。

a.東京電力福島第一原子力発電所を再現したジオラマ。b.震災・原子力災害当時の新聞を展示。c.放射線量を測定できる装置など、さまざまな体験を通して学べる。

三春町深作10-2(田村西部工業団地内) 開0247-61-5721

[周辺施設]

福島県の農業の未来を支える拠点

福島県農業総合センター

農業に関する技術開発などをを行う福島県の農業振興拠点。震災・原子力災害以後は、放射性物質の除去や低減、農林水産物の放射線モニタリング検査、営農再開や農業再生に向けた取組を行っています。



郡山市日和田町高倉字下中道116 開024-958-1706

世界最先端の再生可能エネルギーに関する研究拠点

産業技術総合研究所

福島再生可能エネルギー研究所

福島県を「再生可能エネルギー先駆けの地」とするために整備された研究開発拠点。再生可能エネルギーに関する新技術を生み出し発信すること目的とし、研究開発や人材育成などを行っています。



郡山市待池台2-2-9 開024-963-0813

【見る(施設)】

日本原子力研究開発機構 檜葉遠隔技術開発センター



最先端の廃炉研究



東京電力福島第一原子力発電所の廃炉を推進するために遠隔操作機器の開発・実証実験を行う研究施設。

ロボットの遠隔技術や原子炉建屋内の一室を再現したVRを体験し、最先端の廃炉研究を見学することができます。

東京電力福島第一原子力発電所の廃炉作業を進めるための技術開発と実証実験を行う施設。作業訓練に活用可能なバーチャルリアリティシステムやロボットシミュレータなどを備えた研究管理棟と、ロボットの試験設備を有した試験棟で構成されています。廃炉に向けたさまざまな実規模(モックアップ)試験が行われており、効率的で高度な遠隔技術開発が可能です。遠隔技術に関する研究開発を進めるとともに、情報発信も行うことで、遠隔技術開発の拠点となることを目指してつくりました。

a.廃炉研究にはドローンも使用されている。b.実際の大きさの原子炉建屋を模型で再現。c.広大な内部ではさまざまな実証実験が行われている。

■ 檜葉町山田岡仲丸1-22 地図0240-26-1040

【周辺散策】

町民の想いが詰まったみんなのお家

みんなの交流館 ならはCANvas

楢葉町の中心部にあるコンパクトタウン「笑ふるタウンならは」内に建設された交流施設で、町民ワークショップで語られた想いをもとに設計されました。リビングのようなくつろげる空間やキッズスペースなどがあり、楢葉町民はもちろん、地域や世代を超えて愛されてほしいという願いが込められています。出会い・交流・つながり・発見・挑戦が生まれる“こころの復興”を目指す施設です。

■ 檜葉町大字北田字中満260 地図0240-25-5670

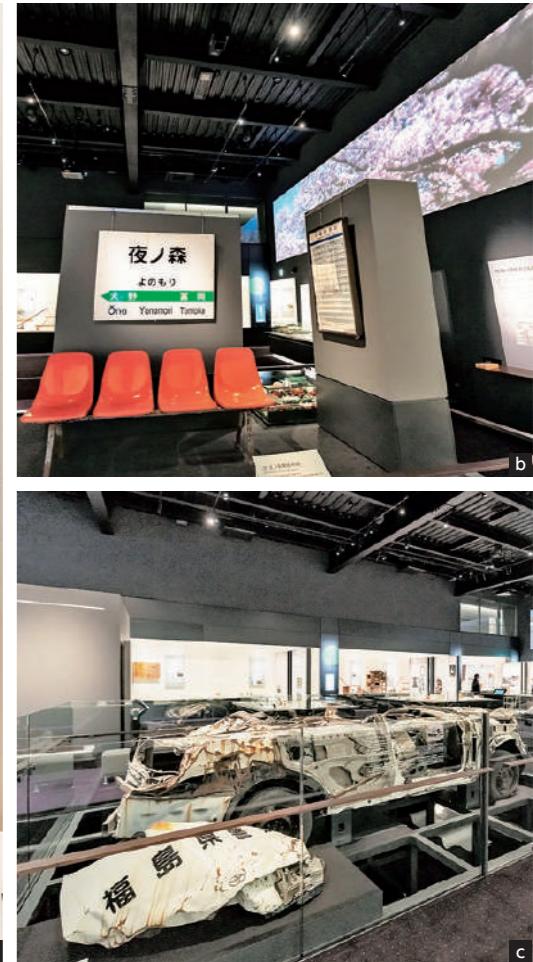


【見る(施設)】

とみおかアーカイブ・ミュージアム



長い歴史の中の「あの日」を残す



「複合災害を地域の歴史に位置づける」をテーマに、東日本大震災と原子力災害により突然奪われた日常を、生活者の目線から伝えています。生じた震災遺産とともに、「あの日」を境に起きた町の変化を知ることができます。

情報発信を中心としたタウンギャラリーに、震災遺産と原子力災害の経験・教訓を伝える展示室、およそ5万点にものぼる資料を保管する収蔵庫と、館内は大きく3つのエリアに分かれています。町民の生活や地域にまつわる資料と震災により生じた遺産を展示することにより、突然奪われた「当たり前の日常」や「あの日」を境に起きた町の変化を伝え、自然災害や原子力災害の経験を未来に継承することを目的としています。町の学芸員が常駐しているため、希望すれば展示解説が受けられます。

a.震災や津波のほか、原子力災害による避難など、さまざまな理由により針を止めた時計を展示。b.2019年に解体した「JR夜ノ森駅」の一部を再現。

c.避難誘導中の2名の警察官が犠牲になった被災パトカー

■ 富岡町本岡王塚760-1 地図0240-25-8644

【周辺施設】

事故当時の状況や廃炉事業について公開

東京電力 廃炉資料館

東京電力の情報発信施設。映像やジオラマの展示により記録を残すとともに、今後も続く廃炉の進捗状況について学ぶことができます。

■ 富岡町大字小浜字中央378 地図0120-502-957



双葉郡のリアリティをダイレクトに発信

ふたばいんふお

双葉郡8町村の現状を共有し、広く伝えるための情報発信拠点。住民目線での震災・原子力災害の捉え方、今までの双葉郡の歩みを知ることができます。

■ 富岡町大字小浜字中央295 地図0240-23-6612



【周辺散策】

立ち入り規制が緩和された、富岡の復興拠点

夜の森地区

原子力災害により立ち入りが制限されていた地域。帰還困難区域の線引とともに夜の森の桜並木も分断されました。しかし、2022年、立入規制が緩和されました。

■ 富岡町夜の森



【見る(施設)】

特定廃棄物埋立情報館リプルンふくしま

埋立処分事業について
体験しながら学べる



a.タッチパネルにふれながら楽しく学べる。
b.埋立処分場の模型を使って説明してくれる。

■富岡町大字上郡山字太田526-7
■0240-23-7781

放射性物質に汚染された廃棄物等の埋立処分について学べる、体験型の情報館。埋立処分事業の概要や必要性、安全対策、進捗状況などについて、「動かす」「さわる」「あそぶ」をコンセプトに、体験しながら理解することができます。事業の安全性について広く知ってもらうことを目的としています。

【見る(施設)】

中間貯蔵工事情報センター

中間貯蔵施設や
地域の発信拠点



a.広大な敷地の中間貯蔵施設について、
図面を見ながら説明。
b.パネルを使って分かりやすく学ぶことができる。

■大熊町小入野向畑256
■0240-25-8377

「中間貯蔵施設」は、除染により発生した土壌等を最終処分までの間、安全かつ集中的に貯蔵するための施設です。中間貯蔵工事情報センターでは、中間貯蔵施設工事の概要や工事の進捗状況、安全への取組を紹介しているほか、除染土壌等の処理の流れを展示や映像などを通じて学ぶことができます。

【周辺散策】

「あの日」のままの風景が、
残るエリア

国道6号

浜通りを南北に縦断する国道6号は地域の主要道路のひとつで、一部が帰還困難区域に指定されています。帰還困難区域内の家屋や店舗の入り口には、10年以上バリケードが設置され、時が止まったような光景が広がっていました。現在も朽ちた建物が残る一方、徐々に建物の解体が進み、新しい町並みへと再生が始まっています。



※バリケードは現在撤去されています。

【見る(施設)】

富岡復興メガソーラー・SAKURA

自然エネルギーが
町に光をもたらす



a.11万枚もの太陽光パネルを見晴台から一望できる。
b.発電所や発電施設について、
説明を聞くことができる。

■富岡町大字上手岡字大石原(下千里地内)
■0240-23-5154

震災と原子力災害の影響で増えた町内の遊休農地を活用してつくられた太陽光発電所。およそ11万枚もの太陽光パネルを設置し、その年間発電電力量は一般家庭約9,100世帯の年間消費電力量相当にものぼります。発電所内には見晴らし台があり、見学が可能。売電した収益の一部を地域復興に役立てています。

【見る(施設)】

福島ロボットテストフィールド

福島の未来をつくる
ロボットの開発拠点



a.ドローン等での実験にも対応が可能。建物からは広大な敷地が見渡せる。
b.トンネルや橋梁、市街地、道路などが敷地内に整備され、災害環境を再現できる。

■南相馬市原町区萱浜 新赤沼83(南相馬市復興工業団地内) ■0244-26-3431

浜通りの産業回復のための国家プロジェクト「福島イノベーション・ココスト構想」により整備された、陸・海・空のフィールドロボットの一大開発実証拠点。南相馬市復興工業団地内の東西約1,000m、南北約500mの敷地内に、インフラや災害現場など実際の使用環境を再現し、ロボットの性能評価や操縦訓練等を行っています。

【周辺施設】

世界最大級の水素製造施設

水素エネルギー研究フィールド

世界最大規模の水素エネルギーシステム。およそ1万kWの水電解装置で年間200トンの水素を製造しています。18万m²の敷地内に太陽光発電を設置し、約2万kWの電力を発電。その電力により水を電気分解して水素を取り出しています。水素を製造し、貯蔵・供給する、低コストな水素製造技術の開発を目指しています。2021年に開催された東京五輪の開会式において、聖火台の燃料としてここでつくられた水素が使用されました。

■浪江町大字棚塙(棚塙産業団地内)



【見る(施設)】

いわき市の震災経験を将来にわたり発信

いわき震災伝承みらい館



震災関連の資料や映像、パネル展示、語り部の講話などを通し、震災の記憶や教訓を確実に後世へと伝えいくための施設。復興に向けた取組を伝えることや、災害に対する危機意識や防災意識の向上なども目的としています。

■いわき市薄磯3-11 図0246-38-4894

記憶の伝承、想いが集まる場所

相馬市伝承鎮魂祈念館・慰靈碑



津波により被災した相馬市の震災前の風景を後世に伝え、来訪者の交流を図ることを目的として建設された施設で、犠牲者への追悼の意が込められています。震災関連の写真や震災当時の津波の映像などを見ることができます。

■相馬市原釜字大津270 図0244-32-1366

ホップとビールで「人」「もの」「こと」の循環をつくる

ホップジャパン



田村市内の委託農家で栽培されたホップを使用する都路町のブリュワリー。1次産業から3次産業を一貫して行う6次化に加え、廃棄される材料を自然に返す0次化の取組に挑戦しています。

■田村市都路町岩井沢北向185-6(グリーンパーク都路内) 図0247-61-5330

まちづくり活動拠点機能を備えた津波避難ビル

いわき市地域防災交流センター 久之浜・大久ふれあい館



災害時の防災拠点機能とまちづくり活動拠点機能を一体化させた施設。災害発生時に地域住民等が緊急避難できるよう整備されており、水と食料などを保管した備蓄倉庫のほか、非常用発電設備等の機能も備えています。

■いわき市久之浜町久之浜中町32 図0246-82-2165

支援の輪が広がる、おもいやりの兵糧蔵

相馬市防災備蓄倉庫 相馬兵糧蔵



震災の教訓をもとにつくられた、多機能型の防災備蓄倉庫。災害時に備え、毛布や水、米などを蓄えているだけでなく、太陽光発電パネルや非常用発電機、緊急離発着ヘリポートなども有しています。

■相馬市坪田字宮東25 図0244-35-3300

ITCを活用した最先端技術で農業復興

株式会社ネクサスファームおおくま



大熊町に2018年に設立。栽培面積2.2haの太陽光利用型植物工場でいちごの栽培・販売をしています。2019年にはGLOBALG.A.Pの認証も取得し農業の再生に挑戦しています。

■大熊町大字大川原字西平2127 図0240-23-7671

【見る(体験)】

世界に1つだけのオリジナルの大堀相馬焼を作れます

大堀相馬焼体験

浪江町が誇る地場産品「大堀相馬焼」の陶芸体験。原料の土から手練りし、ろくろを使った形作りや絵付けにも挑戦できます。世界に1つだけの大堀相馬焼を作ってみてはいかがでしょうか。窯場にはガス窯と電気窯を1基ずつ設置。焼きあがる時の、大堀相馬焼特有の「青ひび」が入る瞬間に鳴る「ピーン」という美しい貫入音も魅力のひとつです。

道の駅なみえ「なみえの技・なりわい館」

町の復興のシンボルとして誕生した道の駅。買い物・食事・休憩ができる、暮らしを支える施設です。野菜や海産物などが並ぶほか、地元のグルメも味わえます。

■浪江町大字幾世橋字知命寺60

図0240-35-4917



楓葉町の新しい農業スタイルを体感

さつまいも苗植え・収穫体験

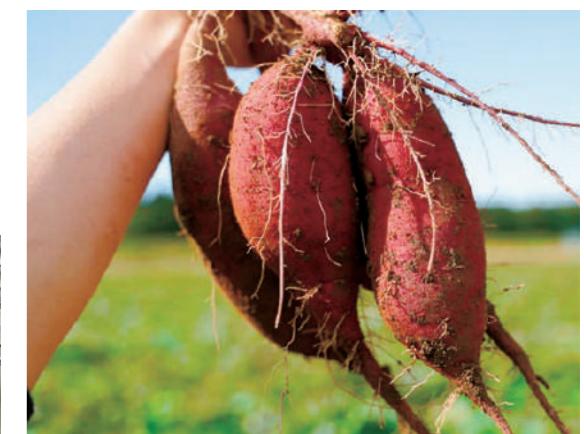
楓葉町内各地に点在する畑でさつまいもの苗植えや収穫を体験できます。沿岸部を中心に広がる総面積40ha以上。農作業を通して、震災と原子力災害の影響やそれからの復興について知ることができます。(時期や天候によりプログラムに変動がございます。)

株式会社福島しろはとファーム

放棄された耕作地の活用を目的として開始されたさつまいもの試験栽培。一面のさつまいも畑の隣には、国内最大級のさつまいも貯蔵庫を備えています。

■楓葉町前原浜城1

図fukushimafarmer@shirohato.com



採れたて新鮮! 絶品トマトを思いっきり堪能!

トマト収穫体験

温室で1年中トマト狩り体験を楽しめます。フルーツトマトなどを含む、色も形もさまざまな最大5種類のミニトマトを袋一杯に収穫できます。味見をして、気に入った品種だけを収穫するのもよし、いろいろな品種を探って食べ比べるのもよし。もぎたてのトマトはまさに極上。おみやげにも最適です。大玉トマト狩り体験も実施しています。

株式会社ワンダーファーム

レストラン・直売所・加工工場を備えた体験型ファームです。トマトを栽培するトマトハウスも隣接しており、食・収穫・買い物を存分に楽しめます。

■いわき市四倉町中島字広町1

図0246-85-5105



海が見える圃場でボランティア

ワイン用ブドウの苗植え・圃場の除草

海を一望できるワイン畑で、ブドウの苗植えや剪定、圃場の除草作業を体験できます。ワインを通して人々の交流や新しい産業が生まれ、着実に前進する地域の息吹を感じることができます。企業CSR活動としての活用も可能です。(時期や天候によりプログラムに変動がございます。)

一般社団法人とみおかワインドメーラー

震災と原子力災害からの町の再生を目指し、ワインを核にした活動を行っています。2016年からブドウ栽培を開始し、2020年に初めてのワインを完成させました。

■富岡町小浜438-1

図0240-23-7606



[聞く] ヒューマン

震災、津波、原子力災害、風評……。未曾有の困難の中で、それでもなお前へ進もうと果敢にチャレンジする人々が、福島にはたくさんいます。そうした人々を本ツアでは「ヒューマン」と呼んでいます。故郷を取り戻すため。人々に笑顔を取り戻すため。次世代のため。挑戦を続けるヒューマンたちとの対話から、多くの刺激や気づきを得ることができます。

**福島で、一緒に
考えてみませんか？**



考える入口、考えるきっかけを作りたい

ヒューマンとして活動する中で「語り人(かたりべ)」の役割は、体験したことを語るだけではなく、富岡町のような地域をどうするのかということを問いかけることだと思っています。町が復興災害から再興していくところまでは語り続けなければならない。人間が死んだとしても言葉は残るし、これまで言葉で紡いできた歴史があります。だから特に若い世代に伝えたい。ヒューマンとして活動する意義はそこにあると考えています。

被災した人たちが立ち直っていく様は、私たちが大事にすべきことや当たり前の日常の大切さを改めて気づかせてくれました。人が壊したものは人が作り直すしかない。そう思えたとき、自分が生きている意味や、使命感のようなものを感じました。そして、最後まで富岡町と一緒に生きようと心に決めました。

失われたものがもう一度再生していくところに自分もいたいし、見ていきたい。そして自分も力になりたい。町をこれからどうするか、そんな夢のようなことが語れる場所はほかにはありません。都会では夢物語だと言われるようなことも、富岡町なら1つの意見になります。

「語り人」は話すだけではなく、一緒に地元のことを考えることが重要。被災地のことを考えながら、じゃあ自分のところではどうしたらいいのか、地元のことも少し考えてみよう。と。ここ富岡町、そして福島県は、課題を見つけて持って帰って、考える、解決するという、最高のフィールドだと思います。

住民



NPO法人 富岡町3・11を語る会 事務局 代表

あおき よしこ
青木 淑子さん

震災数年前に県立富岡高校校長を務める。震災後県内最大の避難先であった、郡山市の「ビッグパレットふくしま」でボランティアに携わり、2013年より語り人(かたりべ)として活動を開始。2016年に「NPO法人富岡町3・11を語る会」を設立し、自分たちの体験を自分たちの言葉で語ることで、「富岡町の震災の実際と現状」、「被災地福島の真実」を世に伝え続けている。

亡くならないでもいい命を救いたい

「亡くならないでもいい命をひとりでも多く救いたい。」その想いが僕をずっと突き動かしています。福島が経験した複合災害は、世界中のどこでもこれまで全く経験していないこと。今僕らがいるのは世界史の最先端。だから我々は証言者なんです。

東日本大震災の教訓を活かさなければ、あの時亡くなった方々に申し訳が立たない。これから起こる災害はもっと大きいという予測もあるし、我々の体験は必ず活かせるはずで、それは経験者がやるべきこと。僕がヒューマンとして活動する意義はそこにある、自分はその教訓と経験を伝えるためのスピーカーだと考えています。この目で見たことを伝えたいし、その目で他の地域を見たらどう感じるのか、自分の視界を伝えたい。福島にいるから見ているものを、どれだけ等身大で伝えていけるか。まずは僕のフィルターを見て、福島のことをわかるとしてほしい。そうしているうちに、だんだん自分のフィルターができるのだと思います。

「故郷」とは単なる場所ではなく、人ととのつながりがあるところです。だからもっと大事にしてほしい。人は独りでは生きられない。震災のせい……というのではなく、震災のおかげで僕らは多くのことに気づくことができた。自分に同じことが起きたらどうするのか。当事者性を持つことが本当に重要。今の福島で大事だとされていることは、来てくれた人の町でも大事だということを伝えたいと思っています。

福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター 特任教授
一般社団法人ふくしま連携復興センター 代表理事

あまの かずひこ
天野 和彦さん

震災時東北最大級の避難先であった、郡山市の「ビッグパレットふくしま」避難所の運営責任者。避難所での支援活動の実体験を踏まえ、避難所運営シミュレーション「さすけなぶる」を開発。今後起こりうるとされる災害に備え、震災や福島の教訓を発信している。そのほか被災者の生活再建、コミュニティ形成のための支援活動などにも取り組んでいる。

**現地にしかない
温度感を大切に**

人間の感情や人間らしさを伝えていく

私が活動を続ける上で最も大事にしていることは、現地にいないとわからない「温度感」を伝えること。感情や友情、未来を信じる気持ちなど、目に見えないもの、それに直にふれられる機会はなかなかありません。

ホープツーリズムは入口であり、きっかけです。葛尾村に来てくれた人、福島に興味を持ってくれた人と直接会えるということは、たとえ短い時間でも、その後の可能性を大きく広げてくれるのです。とても大切にしています。「また来たい」と思ってくれた時に、来られる場所を作つておこう。そのためには少しずつ村との縁をつないでいます。

ホープツーリズムで葛尾村を訪れた子が、大学生になってからインターンでもう一度来てくれたり、定期的に村に遊びに来てくれるようになったりと、具体的に行動に移してくれる人も増えてきました。まずは知識や情報よりも感情の動きを大切に、かっこいい言葉ではなく人間らしさを伝えていくことを心がけています。

福島県、そして葛尾村と同じ経験をした場所はほかにはありません。持続可能な社会を目指す上での良い事例がたくさんあるし、日本の未来を考えられる場所ではないかと感じています。震災を通して覚えた憤りの先にある出口や、地域がどう生き残っていくかについて、じっくり考えてみてほしいと思います。そして、その先に続く地域の未来を、少しでも心に留めるきっかけになってくれたらうれしいです。

したえだ ひろのり
下枝 浩徳さん

震災後、故郷である葛尾村にUターンし、「一般社団法人葛力創造舎」を設立。葛尾村のコミュニティの崩壊を解消するため、地域コミュニティのサポートや地域の活力を支える人材の育成に取り組んでいる。また、地域の資源を活用した事業を起こすなど、事業開発を通して地域づくりにも力を入れており、人ととの結びつきを大切にした活動を続けています。

【聞く】ヒューマン

福島には各分野で復興に向け果敢にチャレンジする人々がたくさんいます。

ヒューマンとの対話を通じて、多様な視点から震災・原子力災害の状況、復興に向けた取組や課題について学ぶことができます。

住民	地域づくり	地域づくり
「あの日」起きたこと、住民の率直な想いを伝える 浪江まち物語つたえ隊  仮設住宅で暮らしていた浪江町民2名で結成。地域に伝わる民話・昔話をはじめ、震災・原子力災害の実話をもとに紙芝居やアニメーションを制作し、全国各地で作品の上演会や上映会を実施。ふるさとの記憶や震災・原子力災害の記憶・教訓を伝え続けています。	住民主体の新しいコミュニティの構築 小高工房 代表 ひろた ゆうこ 廣畠 裕子さん  震災後、小高区の復興に向け、「小高を応援する会3B+1」を結成。住民、事業者、来訪者などの交流拠点「おだかぶらっとほーむ」を運営。「それぞれができること、やりたいことを持ち寄り、行動を起こせるきっかけ作り」を目標に精力的な活動を展開中。	広がる交流の輪この町の変化を楽しむ 浪江町商工会 青年部 せんじ あきひろ 前司 昭博さん  浪江町商工会議所青年部長を務め、地域の活気づくりやPRイベントの運営に尽力。生産者や企業、学生などさまざまな分野層に積極的に関りながら町内のネットワークを構築。住民主体の地域づくりの輪を広げています。
医療・福祉	教育・人材育成	教育・人材育成
震災を通してリーダーの素質を考える 南相馬市立総合病院 院長 おいのわ ともよし 及川 友好さん  震災当時、東京電力福島第一原子力発電所から23kmに位置する中核病院で副院長として現場を指揮。原発の状況が深刻化する中、「病院を、患者を、スタッフをどうするべきか…」自らが下した決断や葛藤を題材にリーダーのあり方について語ります。	社会課題に向き合う若者を育成～“憧れの連鎖”が未来を拓く～ 一般社団法人あすびと福島 代表理事 はんがい えいじゅ 半谷 栄寿さん  元東京電力執行役員。南相馬市小高区出身。復興を担う人材育成のため、高校生・大学生対象の社会起業塾等を主催。「自立した若者が憧れの対象となり、後輩が続く“憧れの連鎖”こそ、未来を拓く原動力になる」との想いから、次世代の育成に挑戦しています。	ローカルに根差しながらグローバルな視点で地域を歩む NPO法人ハッピーロードネット 理事長 にしもと ゆみこ 西本 由美子さん  復興を担う人材育成や地域再生に向けて、高校生等と一緒に国道6号に桜の木を植える「ふくしま浜街道・桜プロジェクト」やチャレンジノブリ原発事故の被災地を訪問し、国際的な視点に立った活動を続けています。
エネルギー	農業	農業
持続可能な農業をエネルギー分野から考える 一般社団法人えこね南相馬研究機構 理事長 たかはし そうへい 高橋 庄平さん  地域再生のため、地元農家と共同し、農地の上に太陽光パネルを並べて発電する「ソーラーシェアリング」による半田半エネのモデルを推進。売電の副収入により農家の収入安定化を図り、持続可能な農業とエネルギーの地産地消を目指しています。	農業を地域産業の中心にさつまいもで持続可能な社会へ 株式会社福島しろはとファーム ながい しょうろう 長井 翔太朗さん  株式会社福島しろはとファームでは40ha以上の敷地でサツマイモを栽培。震災後、放棄された畑作を開拓して新たな畜農モデル・産地の確立を目指しています。さらに町や企業と連携して、貯蔵設備や加工施設を造成。農業の再生と地域雇用の促進に働きかけています。	新しいハブとなり地域農業を支える 株式会社ワンドーファーム 代表取締役 もとさき ひろし 元木 寛さん  農と食の魅力を体験できるワンダー(wonder=驚嘆すべき)なファーム(farm=農場)を目指して事業設立。トマトの出荷および、農業を身近に感じる体験型テーマパークの運営によって、農作物の付加価値向上、地域の活性化だけでなく、農業の扱い手育成に取組んでいます。
事業所	事業所	原発・廃炉
浪江に「ただいま」酒造りの息吹がよみがえる 株式会社鈴木酒店 代表取締役 すずき だいすけ 鈴木 大介さん  津波により酒蔵を流失し、原子力災害による避難を余儀なくされながらも、避難先の山形県で酒蔵を再開。町産の米を使用した酒造りで浪江町の今を発信し続けています。2021年には道の駅なみえに醸造所を開設。10年ぶりにふるさとの酒造りを果たしました。	福島の光を探す仕事地域のワクワクを追求 一般社団法人東の食の会 専務理事 福島県浜通り地域代表 たかはし だいじゅ 高橋 大就さん  浜通りのまちづくりと社会課題解決型ビジネスづくりに取組む「NoMAラボ」を立ち上げ、2020年に法人化。2021年には浪江町に居住を移して浜通りでの活動を本格開始。地域の生産者にスポットをあてたPRを続けている。	東京電力福島第一原子力発電所の今を知る 東京電力ホールディングス株式会社 福島復興本社  福島復興本社の職員から東京電力福島第一原子力発電所の廃炉作業の進捗状況、復興に向けた取組について直接聞くことができます。また、一定の条件を満たす場合は、職員のアンド付まで、東京電力福島第一原子力発電所構内を見学することができます。

【聞く】学校交流

福島県内の学校との交流や、高校生との共同ツアーなどを通じて、福島県の高校生たちと交流することも貴重な経験です。復興に向け様々な活動に取り組む福島の高校生から直接、同世代の想いを聞くことができます。



同世代の想いを聞く

震災当時の様子やその後の生活、復興に向けた想いなど、同世代ならではの感覚で語り合います。



一緒にワークショップ

ともに考え、意見を交換。福島で暮らし、学ぶ同世代からは、多くの気づきを得ることができます。



福島の高校生と一緒にツアー



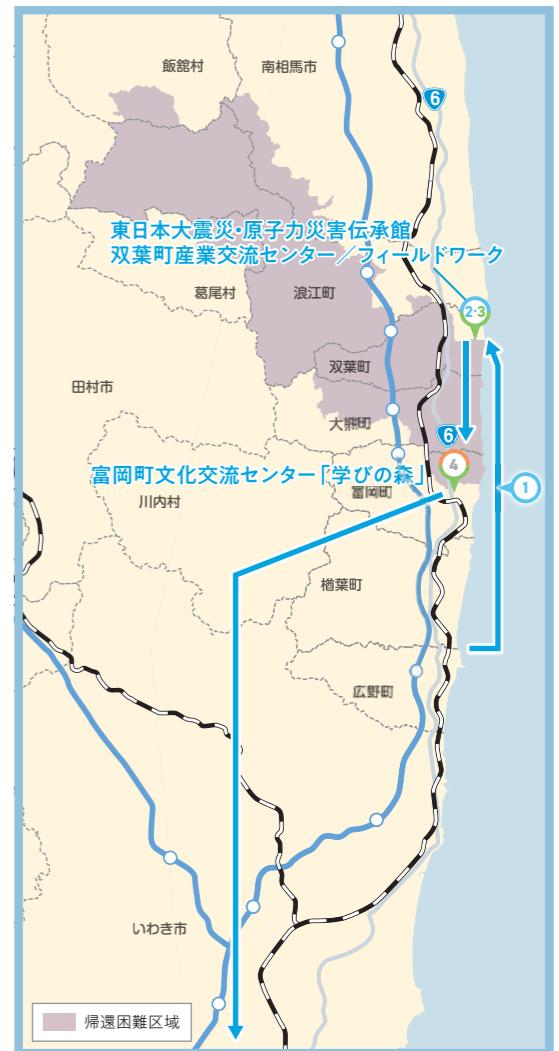
福島の高校生とともにツアーを実施することで、県内と県外の視点の違いに気づき、考え方や知識を共有できます。同世代の震災経験談はもちろん、原子力災害や復興への想いについて聞き、お互いを刺激します。

[モデルコース]

教育旅行

対応のホープツーリズム

「学年行事規模の教育旅行」に



1日

1

見学

国道6号※通過

※一部、帰還困難区域

広野町・楢葉町・富岡町・大熊町・双葉町

帰還困難区域内の町並みを
実際に車窓から見学

帰還困難区域内の家屋や店舗の入り口には
バリケードが設置され、いまだ時が止まったよ
うな光景が見られる一方、一部では除染や建
物の解体が進み、復興に向かう息吹を感じ取
ることができます。

2

見学
対話

東日本大震災・原子力災害伝承館

双葉町

伝承館の一般研修プログラムで
震災・原子力災害、復興の全体像を把握

事前学習

- 伝承館見学 → ●[住民]富岡町3・11を語る会
- ↑ ↓ ●フィールドワーク
- (浪江町沿岸部→大平山靈園→双葉駅周辺)
- ※2~3クラスに分かれて、ローテーション

3

対話

双葉町 産業交流センター

双葉町

[原発・廃炉]
東京電力社員

東京電力福島第一原子力発電所の事故の概
要、廃炉進捗状況等について東京電力社員か
ら直接説明を受ける他、率直な質疑応答(意見
交換)を行います。

4

食事
対話・考える

富岡町文化交流センター「学びの森」

富岡町

ゆったりとした空間でヒューマンとの対話やワークショップを
500席の大ホールや大会議室でのヒューマンとの対話やワークショップなど、比較的大人
数にも対応可能。周囲にはとみおかアカイブ・ミュージアムや夜の森など、学びのフィー
ルドが点在しています。

- [各種分野]
ヒューマン
との対話
-
- [防災・減災]
避難所運営シミュレーション教材
「さすけなぶる」を使用したワークショップ

[モデルコース]

企業研修

「対話型組織開発」
「危機管理マネジメント」と
復興への挑戦から学ぶ
震災・原子力災害の教訓、

震災・原子力災害の教訓、復興への挑戦から企業等の「危機管理マネジメント」や「対話型組織開発」のあり方を考える、中間管理職や危機管理部門、人材開発部門の社員等を対象とした人材育成プログラムです。
フィールドワークや地域団体等との対話による「インプット」とケーススタディ教材等を使用した「アウトプット」を通じ、震災・原子力災害の教訓等を企業としてどう活かしていくかを考えます。



[モデルコース]

インバウンド

SDGsの視点から福島の復興を考える



持続可能な開発目標 (SDGs) の視点から福島の復興を考えるプログラムです。コミュニティの再構築や地域の復興などのローカルな課題を、グローバルな視点で捉え、世界中の人々が生きるために必要なキーワードを発見します。地域を見つめ、復興のゴールとは何か、SDGsの視点から福島の復興について議論します。

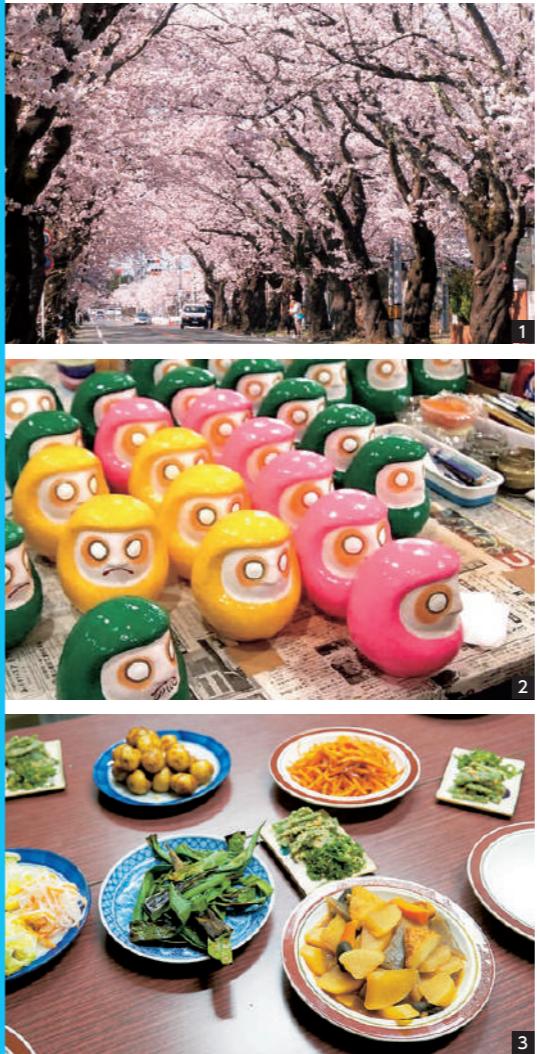


[モデルコース]

個人向けツアー

震災・原子力災害の被災地域である浜通りと阿武隈地域を訪ね、地元の人、食、文化と触れ合う交流体験型のツアーを実施。改めて実感するこの地域の「自然、農林水産物、里山、海、伝統文化など」の豊かさや価値。福島の復興の現状や課題を体感するだけではなく、素朴で温かい地域や人の魅力を五感で感じ、再発見する新しい旅のカタチです。

被災地域の今と想いに触れ、希望に出会う旅



1日



[双葉町産業交流センター]

なみえ焼そば



富岡復興メガソーラー・
SAKURA

富岡町

東京ドーム約8.5個分の
広さを誇る太陽光発電所

浪江町で親しまれてきたソウルフード。真はもやしと豚肉。うまみたっぷりのオリジナルソースが極太麺に絡み、食べ応えも十分です。

(株)ふたば

富岡町

[事業者]
(株)ふたば 遠藤代表取締役

原子力災害の影響で増加した遊休農地を活用して、約11万枚の太陽光パネルを設置。売電した利益の一部を町に還元。復興に役立てています。

双葉屋旅館

南相馬市小高区

[地域づくり]
小高を応援する会3B+1 廣畑さん

2015年にコミュニティサロンを開設。避難指示解除後には、トウガラシの栽培と商品化を通して人々の輪を広げるなど、地域のつながりを見つめ活動を続けています。

1泊2日



フィールドワーク
(夜の森地区)

ふるさとの風景
夜の森の花々

富岡町を代表する桜とつづじの名所。2022年には帰還困難区域が解除され、全長2.2kmの桜並木が開放されました。春には思い出の風景を求めて、たくさんの方々が訪れます。

双葉だるま
絵付け

転んでも起き上がる
双葉町の象徴

顔周りの青い縁取りは太平洋を表現。さらに町の花・桜と町の鳥・キジの羽のモチーフを描いています。キジの羽のモチーフには未来へ向かって羽ばたくて欲しいとの思いを込めています。

農家民宿
いちばん星

南相馬市



郷土料理づくり
「ねぎ味噌づくり体験」

新鮮な野菜や農産物を使用して郷土料理を作ります。地元のお母さんたちとコミュニケーションをとりながら食べる料理は格別です。

“きっかけ”は、福島で、みつかる

福島の今から伝わる、過去と未来。流れた多くの時間の中にある葛藤と決意。

課題に向き合い、あゆみ続ける人々。

ここには、“希望”を持つ人々がいる。“芽生え”を促す場所がある。

ここでつかんだ学びの種が新しい道を示しこれからの人生の糧となるでしょう。

さあ、“きっかけ”をみつけに、福島へ。